

スライド作成のABC

医学生・初期研修医が研究発表、学会発表、勉強会などに参加するに当たって避けて通れないのがスライド作成です。見やすく、わかりやすいスライドを作るには、どうすれば良いのでしょうか？
初心者でも修得できる「一生モノ」のエッセンスを本連載で学びましょう!

Lesson 09 最終回 他者の視点を大事にしよう

柿崎真沙子 名古屋市立大学大学院医学研究科医学・医療教育学分野 講師

皆さんはスライドを作った後、発表前にどんな準備をしていますか？ 学会本番前に予行会を行い、研究室のメンバーの前で発表して、改善の指摘などを受けているでしょうか？ 講義用の場合は、講義前に誰かに見せるのでしょうか？

聴衆が理解できるスライドか確認してもらおう

「誰かに見せて指摘してもらおう」というのは、わかりやすいスライドを作成する上でとても大事なポイントです。作成者自身はスライドを作る過程で何回も見返しているため、スライドの内容や、どのような意図でそのスライドを作成し、その順番になっているかをよくわかっていると思います。しかし作成していない他の人、特に実際発表を聞く聴衆に対し、1回の発表で内容や意図が伝わるスライドになっているのでしょうか？ 周りの人がおおよその内容を想像できるような場なら理解してもらえらるかもしれませんが、普段あまりその研究内容を扱わない人が多い場での発表や一般向けの講演などでは、「その分野の研究について触れるのが初めて」という聴衆も少なくありません。そのため、誰かに自分のスライドを事前に見せて、「ここはわかりやすい」「ここがわかりにくい」といった指摘をしてもらい、聴衆の理解度に合わせてスライドを修正していくというのはとても大切です。自分が理解できるからといって他人が理解できるとは限りません。
また講義などでは、それほど詳しくない分野のこ

とでも、スライドに起こして話さなければならない場合があります。その際「あれ、自分でも話していて混乱するな。わかりにくいな」というスライドがあると、大抵聞いている方もわかりにくいことが多いです。自分が理解できていないことは、他人にも理解しにくいものです。連載第6回で紹介した、いろいろなどころでわかりやすかった！といわれている感度・特異度のスライド(図)も、最初は文字と数字だけで説明していて「いまいち伝わる感じがしないな」「自分で話していて混乱するな」「数字だけだと補足説明がないとわからないな」と感じるのが数年経きました。そのもやもやがあったからこそブラッシュアップにつながり、わかりやすいスライドが作成できたわけですが、もやもやしたまま講義をしてしまった学生の方たちには今考えると本当に申し訳ないですね。

というわけで、私はスライド作成でつまづいたら、①ある程度自分の研究内容がわかっている研究室のメンバーの前でスライドを見せて発表し、指摘してもらおう、ということと、②分野が異なる人にスライドを見てもらってわかりにくいところを指摘してもらおう、ということをしています。「今度こういうところで発表をするんだけど、ちょっとスライドを見てもらえないだろうか」「〇〇学科の×年生向けの講義なんだけど、この内容は難しすぎないか」「ちょっとこのスライドがわかりにくいかな」と思っているんだけど、どうすればいいだろうか……。結構な頻度で何人かに相談しています。ちなみに、研究室などでの学会予行はこの限りではありませんが、協

力いただく方も忙しい方が多いので、スライドを使いたいといわれたら協力いただいたお礼に快くお渡ししています。やっぱりお願いするだけでは一方的ですからね。

アドバイスをもらう際は具体的に質問する

他者に指摘をもらう場合は、可能であれば実際に大きなスクリーンでスライドを投影して、発表を見てもらうのが一番良いと思います。大きく映すとささいなミスであってもよくわかります。また学会発表の場合、緊張する本番に向けた予行練習にもなりますし、想定問答もできるからです。一方で、完成形まで持って行く手前で誰かに意見を聞きたいこともあると思います。口頭やメールで「学会発表のスライドを作っているけどイントロが作りにくい」と、文章だけで伝えても伝わらないので、第2回でお伝えした通り、まずは手を動かしてスライドを作ってみましょう。そして可能であれば「このスライドとこのスライドとどちらが良いか」「こういうことを伝えたいと思っているがこのスライドで伝わるか」「文章と表形式とどちらが良いか」といったように、具体的なスライドを提示して、アドバイスをもらうと良いと思います。

実際の講義や発表のように口頭説明をしている時間がない場合は、スライドを送って「この部分が伝わりにくいんじゃないか」と思っている」といったように、こちらが具体的にどの部分で迷っているかを伝えてアドバイスを求めると良いでしょう。また、「ばつとこの資料を読んだだけで内容がどこまでわかるか」といった形で聞くこともあります。いずれにせよ、より具体的に疑問を提示したほうがアドバイスはしやすいですよ。

今まで9回にわたり、スライドの作成について連載をしてきました。基本的な事項を中心に紹介していたため、スライド作成にある程度慣れた方には物足りないこともあったでしょう。また、すでにスライドを作る機会が多い方には、「自分はこうしている」「このほうがやりやすい」という事項もたくさんあったかもしれませんが……。その一方で「こういう作り方もあるのか」といったような新たな発見を得られた方がいらっしゃればうれしいです。そういう方が多いといいのですが……。スライド作成の基本的事項の一つの流れとして、この連載が多くの方のお役に立てば幸いです。

感度・特異度

● 感度が高い

- 偽陰性が少ない
- 疾患がある人を、疾患ありと診断できるか
- 検査結果陰性の時に威力を発揮し、除外診断に有用
- 感度が高い検査=この検査が陰性であればその病気を持っている確率は非常に小さい!
- 感度99%:患者さん100人を診察すれば、99人に所見が見られ、疾患があるのに所見が見られない人は1人

		疾患	
		あり	なし
検査	+	A	B
	-	O	D

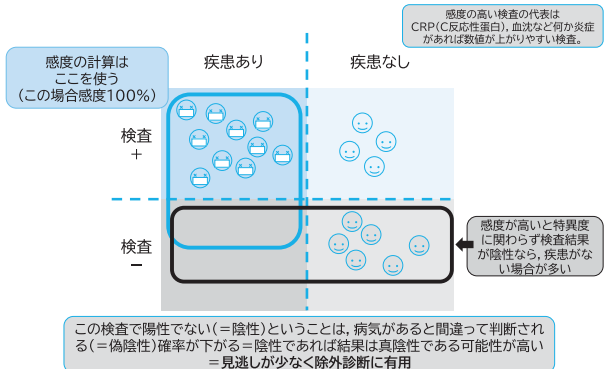
● 特異度が高い

- 偽陽性が少ない
- 疾患がない人を、きちんと健康と診断できるか
- 検査結果陽性の時に威力を発揮し、確定診断に有用
- 特異度が高い検査=その検査が陽性であればその病気を持っている確率は非常に高い!
- 特異度99%:100人の健康な人を診察すると99人に所見が見られない

		疾患	
		あり	なし
検査	+	A	O
	-	C	D

●図 感度・特異度について説明したスライド

感度が高い検査のイメージ



内科診断学の定番テキストの第4版。症候から診断に至る思考プロセスを丁寧に解説。

内科診断学
MEDICAL DIAGNOSIS
第4版
福井次矢 奈良信雄 松村正巳

症候・病態から診断へ
そのプロセスを徹底解説

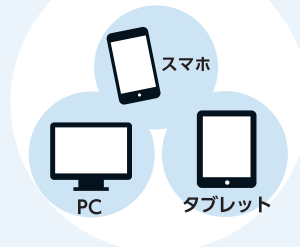
付録電子版付
書籍全文収録+電子版限定の80症例を追加!

内科診断学 第4版

MEDICAL DIAGNOSIS

編集 福井次矢 東京医科大学茨城医療センター 病院長/京都大学名誉教授
奈良信雄 日本医学教育評価機構 常勤理事/順天堂大学医学部 客員教授/東京医科歯科大学 名誉教授
松村正巳 自治医科大学地域医療学センター センター長/地域医療学センター 総合診療部門 教授

付録として、マルチデバイスで閲覧可能な「web電子版」付



- ▶ 好評の「症候・病態編」では、医学生・研修医がおさえておきたい症候・病態を網羅。
- ▶ 本文オールカラー、豊富な図表とともに、症候から診断に至るまでの思考プロセスをわかりやすく丁寧に解説。
- ▶ 今版では、「症例編」の内容を刷新し、掲載症例数を大幅に拡充させ、具体的な症例を通じた学びがますます充実。

詳細はこちら



●B5 頁1104 2024年
定価:11,000円(本体10,000円+税10%)
[ISBN978-4-260-05315-0]

目次 I 診断の考え方 II 診察の進め方 III 症候・病態編 IV 症例編

医学書院